
えっ?転生?しますけど,なにか?

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えっ？ 転生？ しますけど、なにか？

【Nコード】

N3946R

【作者名】

天孤

【あらすじ】

ジーザスッ！！ ま、まさか俺が死ぬとは……………ん？ ああ、すまない。気が付かなかった。俺の名は水森^{みなもり} 慎吾^{しんご}。16歳。ぴっちぴちの高校一年生さ。それも過去の事だったが…。何故かという俺は死んでしまったらしい。…いや、殺された、という方が正しいか。とにかく死んだ俺は、神の手により転生させられるらしい。えっ？ どこに行くかって？ それは上のほうに原作が書いてあるからそれを見てくれ。あっ！ ごめん！ メタな発言しちゃダメだね。まっ！ とにかく俺の第二の人生、始まります……。※不定期

になるかもしれないが、気になったら見ていってください。

第1話　ぷろろおおおぐうううーっ!!!!!!!!!!
（前書き）

(前書き)

いやいや。

なんか勢いあまって書いてしまいました。

とっても前から書きたかったんですけどね。

ああ、学校に行ったらまた友達に怒られてしまう。

まだ他の小説一つも終わっていないしね。

まあまあ、気にしないで読みましようや、旦那！！

ということが始まります……

第1話　ぷろろおおぐうううーっ!!!!!!

ふははははははh……、あっ！す、すいません。調子乗ってました…。

少し頭がアホになってたが気にしないでくれ。俺も困ってたんだ。色々だね……。

ま、まあそれは置いといて最初に俺の自己紹介をしようと思う。

俺の名は水森^{みなもり} 慎吾^{しんご}、16歳。普通の高校一年生さ。

成績やら、その辺は放っておいて欲しい。気になる人は妄想をしないとくれ。

そんな俺なんだが最初に狂っちゃうほどの事件があったんだ…。とにかく説明しよう。

その事件があったのが今日なんだが別に変わったこともない平和な日常だったんだ。

朝起きて、朝飯食って、学校行って、授業受けて、全部終わったら帰る。

そんな感じだったんだが事件は帰り道に起こった。

「だぁー！今日もやっと終わったー！くうー！早く帰ってゲームしてー」

やっと終わった学校の授業。俺は靴を履き替えると、家に帰るため歩き出した。

「ふう。にしてもこう刺激のない日常ばっかしだと、なんか飽きてくるわー」

別に本気で思ってるわけではない。二次小説みたいに異世界にいったって、

人を殺せるわけないし、一人ぼっちで暮らしていけるわけない。

しかし平和すぎるこの日常は流石に刺激が少なく、愚痴ぐらいぼやきたくなる。

「まあ平和が一番だと思うけどねー。でも魔法ぐらいあってもよくないか？」

道の真ん中で独り言を言っていると流石に危ない人みたいだ…。

向こうの方で若い奥さん方がこっちを見て何か言ってるし…。

はぁ…帰るか…。俺は溜め息一つこぼすと再び歩き出した。

それから10分ほど経つと、俺は工事中のビルの近くを歩いていた。

「（なんかこういう所歩いてると、鉄骨が落ちてきそうで怖そうなんだよな）」

俺はそう思うと少し怖くなり速めに歩くことにした。

落ちてきたら嫌だし、さすがにミンチになりたくはない。

そんな時、不意に上のほうから金属の擦れるような音が聞こえた。

俺は嫌な予感がして、さっと上を見上げてみると、鉄骨が……

「な、なに〜〜〜〜っ！！！！」

俺は体の全ての力を使い、瞬時に地を蹴り、その場を飛びのいた。

「（た、たすかった……）」

————ドォゴンッ！！！！！

「ぐっはあああっ！！！！」

な、なにが……。俺は一瞬何が起きたのかわからずパニックしてしまった。

そりゃ鉄骨を避けたと思ったら、いきなりの衝撃、そして体の激痛。どうしたらいいのかわからず、動かしにくい首を動かし、周りを見てみると、

右の方向に地面に落ちた鉄骨、正面にはフロントがへこんだトラックがあった。

く、そ……、不幸すぎるぞ…俺。鉄骨の後のトラックでどんだけ…。

俺は徐々に薄れていく意識に抗わず、死を迎えた。

親不孝な息子ですいません。母さん、父さん。

――――回想終了

『で、気はすんだかい？』

「まあな。それであんたは？」

俺が声のする方を見ると、鬱陶しいほどのイケメンがいやがった。

『それはありがとう。でも僕達はほとんど全員イケメンでね。』

といっても元々姿形なんてないけどね。これは君の想像というかイメージかな？』

心の中を読むな…。

「うっせえ。それなら女の方にして欲しかったよ」

『まあいいじゃないか。それより自己紹介をしよう。僕の名はシリウス。』

特に役職はないけど、君のいた世界とかを管理してたりするよ』

シリウスって……。厨二病に嵌った奴が言いそうな名前だな。

まああまり気にしないが、さすがに面向かって言われると、恥かしい。

「世界の管理？それじゃあシリウスは神なんかか？」

『神、というか、まあそんな感じでいいよ。そんなの肩書きに過ぎないけどね』

「それでそんなお前は俺になんの用だ？」

『そうだね。まず君に謝らないといけない。すまなかった…』

「はあ？なんで謝らないといけないんだ？」

『実は君の死は普通なかったものでね。不具合から生じたものだったんだ』

……ほお。お前らの所為で俺は死んだと…。

「……ふん」

『…実に軽いリアクションだね。怒り出すと思ったんだけど…』

シリウスは俺の軽いリアクションに少し驚いた。
俺はそれに肩をくすめながら言った。

「まあ怒ってない事はないが、別にどうでもいいな」

『僕としては楽でいいんだけどね。まあ話を戻そう。
とにかく君の死は普通僕達の世界では受け入れられるものじゃないからね。』

僕達としては如何しようか迷ったのさ。その時ぴーんときてね。
君を転生させることにしたのさ。』

「ふむ…。その説明は？」

シリウスはこちらに手の平を向け、言った。

『焦らずに…。転生するに当たっての説明だが、まず元の世界には戻れない。』

すでに世界が君のいた場所を修正してしまってるからね。戻るスペースがない。

だから君には異世界、もしくは平行世界に行ってもらうことになる。』

「それは何処でもいいのか？ゲームとか漫画の中とか…」

シリウスは俺の問いに自信満々の表情で言ってきた。

『もちろん！どこでも選び放題さ！…で何処に行くか決まってるかな？』

「そうだな…。俺は“エム×ゼロ”の世界に行きたい。いけるか？」

前々から行ってみたかったし。だって魔法だぜ！！ロマンじゃん！！えっ？ネ○ま？あの世界はちょっと危なすぎんだよ。主人公ネガティブすぎだし…。

『そうだね…異世界というより、平行世界に近いね。もちろんいけるよ』

「そうか…。それ以外に何か説明は？」

『それ以外に、君には三つの願いを叶えようと思う。何故かという
と、

まあ、こっちの所為だからね。これは餞別だと思ってくれていい』

「三つか…」

正直いきなり言われても直ぐには決めれない…。

俺はシリウスに少し待ってもらうように言うのと、じっくり考え始めた。

――――――30分後

「よし。決まったぞ、シリウス」

俺がそう言ってシリウスがいるであろう方向を向くと、
そこにはコタツに入り、みかんの皮をむくシリウスの姿があった。

『うん？決まったのかい？』

「……ずいぶん人間じみた神様なんだな、お前……」

『まあね。みかんとコタツは好きなんだ、僕。…それで何にしたの？』

そうだった。まさかの光景に忘れるところだった。

俺は、未だにみかんを食べているシリウスの向かい側に座った。まさか死んでからコタツに入ると思わなかった……。

「まず一つ目だがやはり魔力だろ。目立たないと原作に入り込めないしな。

魔力量としては、やっぱり先生レベルぐらいは欲しいな。入学時には……」

『そうだね。魔力はあるにこした事はない。といっても別にあっても原作と、

関わるかは君次第だけだね。まああった方がいいかな』

俺はみかんを一つ取ると皮をむき始める。

「二つ目は身体能力の向上。人間の限界を超さない程度にだけど。これは最初からある訳じゃなく、ちゃんと鍛えたらそこまでいけ

るって感じ。

最初からあったら面白みがない。人生に刺激がなくなってしまう」

『確かに最初からあっても面白くないね。次は？』

俺は一つみかんを取ると、それを口の中に放り込む。うん。甘酸っぱい。

「（ごくん）…ん、最後は才能。商才、武才、その他にも色んな才能があるが、

やっぱ色んな事したいし、その方が人生を楽しめそうだ。刺激多そうだし。

別に直ぐに何でも出来るとかじゃなくて、努力すれば一般人より習得が早い、

みたいな感じが一番いいな。別にそこはあんたの裁量に任す」

『ふうん。まあそこらは適当に決めていくよ』

「で、願いは叶えてもらったが、他にはあんのか？」

俺は残りのみかんを一口で食べると、皮をコタツの横にあるゴミ箱に捨てた。

というかくつろぎ過ぎだな、俺たち。

『そうですね。後は容姿とかですかね。名前は変えても変えなくても、

どっちでもいいので。その他は何処に生まれるかとかです』

「そうだな……じゃあイケメンで。10人中9人は見惚れるくらいの。

詳細的にはシリウスが決めてくれ。ちゃんとカッコよくしてくれよ」

『これは責任重大ですか……。名前はどうします？』

「いや。別に今のままでいい」

親に貰った名前だしな。あまり変えようとは思わないな。

『…そうですか。それならいいです。あとは生まれる場所ですが…』

「あゝ、まあその辺は原作メンバーの家の近くにしろといってくれ」

『原作メンバーとは？ 柊、三国、乾という女の子3人組ですか？』

「ああ。九澄はどうするか…。俺の邪魔とかしてきそうだな。まあ大丈夫だろ。

俺が頑張ればいい。いざとなれば九澄を聖風に近寄らさなければいいしな」

『ふふ。それもそうですね。じゃあそろそろ……』

シリウスはそう言うのとコタツから出て立ち上がり、右手を上に掲げた。

すると上のほうから光の塊が落ちてきて、地面にぶつかった。

ぶつかった衝撃で光が辺りに充満し、目があけられない。ある程度時間が経ち、

光が収まってくると、そこには一つの扉が立っていた。全てが真っ白である。

『この扉を潜れば、すぐに転生となるでしょう』

「そうか……」

俺はそういうと扉に近づき、その扉の取っ手を握った。そこで一度シリウスの方向に振り返る。

「行ってくる。ありがとう。世話になった、シリウス…」

『いえ。貴方の人生に幸あらん事を……おたっしやで』

「ああ」

俺はそう言うと取っ手を回し、扉を潜った――――

――
――
――
――
――
――
おぎやああ、おぎやああ、おぎやああ

俺の第二の人生、始まります……。。

続く

第1話　ぷろろおおぐうううーっ!!!!!!
(後書き)

いやゝ、なんかいつも長くなってしまう、プロローグ。

まあその辺は気にしないでほしいっす。

次回も楽しみにして欲しいっす。

じゃ!! バイビー!!

第2話 え？原作？その前に少年時代ですが？

— — — — — S i
de 慎吾

おいつすっ！！この世に生まれてはや6年。

ええ。まだ幼稚園児ですとも。え？赤ん坊の時の話はないのかつて？
バカ言っちゃいけねえよ、奥さん。そんな黒歴史だれが言いますか、
だれが……。

想像してみろ。高校生がお母さんにおしめを替えられる姿を……。何
処が楽しい！！屈辱じゃあッ！！

……ふう、まあもう慣れちゃったけどね……。何も考えないことにし
たんだよ……。ふふふ。

まあその話は置いといて、幼稚園の話なんだが、少し話したいこと
があるんだ。

それは俺の通う幼稚園に、柊愛花、三国久美、乾深千夜がいたんだ。
まさか幼稚園で会うとは……。

といっても皆けっこう家が近かったらしい。そんなこと普通気が付かないけどね。

この頃からこの3人は仲が良いらしく、殆どの時間一緒にいるのを見かける。

小、中学校は仲がいいと知っていたが、幼稚園も仲がいいとは知らなかった。

という俺もこの3人の名前を聞いた後、話しかけて友達になった。

最初はぎこちなかったが、

今では随分仲が良くなっていると思う。何度か愛花の父親である柊賢二郎を見たことがあるか、

俺のほうを見て少し睨んできた。…おいおい、愛娘に男を近寄せたくないのはわかるが、

幼稚園児に向かって睨みはないだろう。この頃の男にそんな感情持つてゐるわけないだろ。

まあ俺は俺で柊父の睨みを軽く流したが……。その時の柊父の顔は忘れられない。

柊父の事で思いましたが、柊母の方はすでにお亡くなりになってい
るらしい。真に残念である。

何故知っているかというと、愛花にそれとなく聞いたからだ。まあ
その時の愛花の顔は、

悲しそうで悲しそうで、なので抱きついておきました♪だって泣き
そうだったしね。

悲しいときは人肌もとい体温ですよ、旦那。ちゃんと効いたのか、
泣かずにすみえましたよ、ええ。

三国久美に関しては、どうやら原作どうり兄の影響で空手道場に通っているらしい。

といってもまだそんなに強くはない。そりゃ幼稚園児ですから。それとカタツムリ事件はまだ起きてないらしい。あれは誰でもトラウマになると思うな、うん。

でもあの事件は6歳のとき起こったっぽいからな。少し注意しとか…。

乾深夜は特にない。身長が小さいのと、少しマせているのと、人形を持っていることしか知らん。

ただその人形がキモカワ系であり、けっこう無口でミステリアスである。

あと何度か家に行った事があるんだが、一緒にゲームをしたら全敗した。強すぎだと思う。

まあ何度かやったら、俺も強くなってきて勝敗が五分五分ぐらいになってきたので良しとする。

この辺りで乾に勝てる奴がいなかったらしく、そのおかげで乾とはお互いを称えあった仲である。

ただ時々言うオヤジギャグは勘弁して欲しい。愛花は笑うが、辺りは寒さで死んでしまう…。

まあ皆の紹介はこの辺にしといて、俺の現在の状況を説明しときたいと思う。

現在6歳の俺だが、いろいろ習い事をしていたりする。皆はわかっていると思うが、

これは自分の才能を試すためで、俺がいろいろやりたいからだ。

現在は野球、サッカー、テニス、ピアノ、ギター、ダンス、絵画、塾といった感じ色々やっている。

運動系は体力などを上げるため、音楽系などは趣味、絵画は創造性を鍛え、塾は知力を鍛えている。

あ！あと久美が行っている空手道場にも行っていたりする。鍛えたいしね。あと久美に勝ちたい。

他にもやりたいが、流石に体が持たないし、時間がない。あと金がない。

あと親が勝手に応募して、子役としてドラマに出てたりする。まあこの容姿ですから……。

まだ人気はないが、徐々にファンも増えてるらしい。まあファンレターが来てるのを見た。

他には体力作りにランニングや、筋トレをしているが、まあ軽めだから特に効果は見られない。

「しんごくん？どうしたの？」

「いや。考えごとしてただけだよ」

「ふん」

流石に考えすぎてたのか、左横にいた愛花が話し掛けてきた。いまは昼休み。いまは運動場の片隅にある長椅子に座っていた。右横には深千夜がおり、久美は横にあるブランコをこいでいる。すると深千夜が持っている人形で遊びながら言ってきた。

「そういえばこのまえしんごが、どらまにでてたわね…」

「ん？ ああ。『デカ○ンコ』の事件に巻き込まれた子供役だろ？ そんなに出てないけどな」

「しんご…。そのいいかたじゃ、なにかきたなくきこえるわ…」

「うるせえ。俺も思ったとこだ…」

深千夜と話していると、ブランコをこいでいた久美がブランコから下りてきてこちらに向かってきた。

深千夜の隣に座ると少し息を切らしながらも、こちらを向いて話し掛けてきた。

「でもてれびにでてるだけでもすごいよね！」

「うん」

「そうかも…」

久美の言葉に愛花と深千夜は同意してくる。

凄いと思うが、人気なかったらこのまま消えていくしな。ないと思うけど…。

「まあお前ら3人も応募すれば絶対受かると思うぜ？3人可愛いし…」

「「「／／／／／／／」」」

「……いや、赤くなりすぎだから…」

俺の言葉に3人はぎこちなながらも言った。

「……でもねえ」

「……うん」

「……そうだね」

何なんだろうか、こいつらは……。

「「「しんご(くん)、かっこいいし!」」」

「…はぁ!？」

突然の言葉に俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「まがおでいわれたら、はずかしいよお／＼／＼」

「それにいきなりいわれても…」

「わたしなんておとこっぽいっていわれるしね…」

愛花、おまえそんな言い方可愛すぎて攫われるぞ、マジで。
深千夜はしらん。可愛いものは、可愛い。言って、何が悪い。
それと久美、ズーンってなるな。かわいさ半減だぞ。

「まあいいじゃん。とにかく遊ぶか!ぱっつと行こうぜ!」

「おっ!!」

「いこっ!!」

「なにかおっさんみたいね…」

深千夜の呟きは聞きません。ええ、聞きませんとも。

俺は椅子から下りると、遊具を目指し走り出した。

さあ俺の動きについて来れるか！！3人娘よ！！はーっはっはっはっはっは！！。

「ふははははは！！！」

「は、はいよ、しんごくくん…」

「あいつはやすぎ…」

「ばか…」

俺はその後、3人娘が疲れ果てるまで、遊びつづけた。

といっても30分程度ですけどね。幼稚園児の体力なめんな！！！！

[illegible]

それから幾年が過ぎ、現在は11歳。身長は11歳にしては大きく、150cm。

天才子役として俺はドラマに出演し続け、習い事もあの時から何個か増えたが続けている。

学校ではモテてるので大変だ。ドラマ出演も拍車をかけている。そうそう学校で思いましたが、

現在この学校には愛花、久美、深千夜の3人も通っている。何故だ
と思う？説明しよう。

原作では愛花は父親である柊賢二郎の手によって女子学園に通っていたが、そこは愛花が、

『しんごくんといっしょのがっこうじゃいといや！おとうさんなんかきらい！』と必殺技を発動し、

柊父のハートをブレイクさせた。ざまあWWW別に久美、深千夜の二人にはそういうのはない。

なぜそんな状況になったかというところ、やはり原因は俺。まあ仲良িশね。俺も離れたくはない。

そして今は放課後。

俺の教室である5年生の教室で俺はランドセルに教科書を片付けていた。

教室の外には俺を見ようと女生徒がたむろっている。もて過ぎも少しキツイ。

「いつもたいへんだね。慎吾くん」

「そうでもないさ。慣れてくる」

「あはは。それもそうだねー」

俺は話し掛けてくる愛花に軽く返すと、ランドセルを背負いながら立ち上がった。

俺はそのまま愛花と一緒に人ごみを掻き分けながら教室を出ると、

少し離れたところから、
二人の女生徒が近寄ってきた。もちろん久美と深千夜である。

すこしここで現在の3娘の容姿を説明しようと思う。

まずは愛花。見た目的には基本あれが小さくなったと言っておこうか…。

俺より10cmほど小さく、胸は少し膨らんだ程度である。まあまあ大きくなると思うので、期待大だ。

しかも年を重ねるほど天然度が増してきて、それがいい感じに男どもを刺激してくる。

あの小動物を思わせるような雰囲気は、周りの男子を魅了してくる。

次に久美、。やはりロングの髪に、女子にしては高身長で、すでに150cmほどの身長である。

空手はまだやっているし、俺との試合も中々の白熱振りだ。ジュニア大会では何度か優勝した。

しかし最近筋肉が気になってきたらしく、中学ではやめるかもしれないらしい、と言っていた。

でも運動により引き締まった体は、周りの男の視線を独占している。スラッとした生足はヤバイ。

しかもこの年にしては胸が発達しており、運動時のあの揺れるボインは目が離せない。

そういえばカタツムリ事件は起こってしまったらしい。未然に俺が防ごうと思っていたのだが、

その日はドラマの撮影で久美と帰ることが出来なかった。

最後に深千夜。これは一部の男に人気かもしれない。やはり独特な

雰囲気を持ち、
変わった趣味を持ったため、一部の男子にしかこの魅力はわからない
だろう。

胸は絶望的でない。身長は愛花より少し小さいぐらい、髪型はだいたい
原作と同じである。

特に説明することもなく、泣きぼくろが少々チャームポイントとな
っているとかいえない。

まあ接してみればいろいろ面白いし、可愛い所もあるので頑張っ
てくれ！でもオヤジギャグは寒い。

あと言うのを忘れていたが、最近ゲームなどその筋での大会で優勝
したらしい。

時々一緒にゲームをやるが、現在も俺と深千夜の対戦勝率は五分五
分だ。

「…おーい、愛花く、って慎吾はなにしてんの？なんか難しそうな
顔して…」

「考え中？」

「いや。ただ少し考え事をな。それより帰ろうぜ」

俺は問い掛けてきた久美と深千夜に返事を返し、下校を促した。
すると横を歩いていた愛花が俺に話しかけてきた。

「あれ？今日はクラブじゃないの？」

「ああ。今日はドラマの撮影があつてな。クラブは休みだ」

「ふうん。慎吾もたいへんだねえ。私はクラブあるから、先行つとくわ。じゃあね」

「私もクラブあるから、じゃあ…」

「ああ。二人ともまた明日な！」

俺は先に行く久美と深千夜に手を振ると、未だに横を歩く愛花に聞いた。

「…で、愛花は行かないのか？お前もクラブあるだろ？」

「うん。今日は少し用事があるからね。先に家に帰るんだ！」

「そうなのか。まあ俺は少し急がないといけないから、じゃあな！
愛花」

「うん！またね！」

俺は靴箱から靴を取り出し、履き替えると、校門前に止めてある車の元に向かった。

車の元に向かうと、そこにはマネージャーである新堂 美穂（20歳）がドアを開けて待っていた。

車の近くには何人かの小学生、及び中学生がたむろっており、俺が近づくとき少しざわめいた。

「すみません。遅れました、美穂さん」

「ううん。別に遅れてないよ、慎吾くん」

「今日はドラマの撮影ですよね？」

「うん。あと雑誌の人が来るから、それもあるかな」

「そうですか。じゃあ行きましょうか」

「そうだね。じゃあ車に乗って」

俺は車の後部座席に乗り込み、続いて美穂さんが乗ってきた。その後、ドラマの撮影を終えたあと、雑誌のインタビューを受けた

俺は、我が家に帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり」。おにいちゃん」

俺が扉を開け、ただいまを言うと何時ものように、我が愛しの妹が走ってきた。

妹の名前は水森 奈菜（5歳）俺と同じでっこう美形、というより可愛さがあり、
なかなかの癒し効果を持つ女の子だ。まだ恋愛感情を持つ年頃ではなくモテてはいないが、
あと数年もすればかなり周りの男子どもにモテる筈だろうと思われる。

といってもまず俺が奈菜に飢えた男子どもを近寄らせないので、そんな心配はない。

「きょうも、てれび」？」

「ああ。今日もテレビだぞ」

「そっか」

ああ。かわゆす。妹萌えは凄いぞ、おい。

「慎吾、帰ったの？」

「うん！」

「早く手を洗ってきなさい。ご飯よ」

「わかった」

ちなみに今は母である水森 華菜（35歳）。30代中盤だが、見た感じ20代前半にしか見えない。

元グラビアアイドルで今はタレントとしてテレビに出演している。それに体がやばい。

ボンツ、キュ、ボンツって感じのスタイルで、美しいというより、可愛いと言う方が似合う女性だ。

正直男としては少し危ない人で、抱きつかれた時には元気になった息子を隠すのに必死である。

髪型は腰ぐらまでのロングで、少し茶髪がはいっている。目がクリツとしていて可愛い。

少し天然が入っており、時々ドジなどところがあるが、そこが逆に男どもの心をくすぶる。

ちなみに父は一流企業のエリートマンで、今は海外へと出張に出ている。

何時帰ってくるかわからないが、頑張っているはずである。基
本家にはいない。

「という事で、頂きましょう」

「はい」

「「いただきます!!」」

俺達はご飯を終えると、皆で風呂にはいった。正直キツイッス。
その後はベットに入り、グッスリ寝る。そんな感じで俺の一日が終
わる。

次は何時の事になるかは知らんが、次あう時まで元気にしとけよっ
!!

第2話 え？原作？その前に少年時代ですが？（後書き）

結構長く書けたとおもいます。

次はあまり考えていないので、何時のことになるやら…。

第3話 まだだッ!! まだ原作ではないのだよッ!! 諸君ッ!!

— — — — — side 慎吾

やあ!! みんな大好き、慎吾おにいさんだよ、ってイタッ! 痛い、ちよ、ま、まって、ごめん…。

…ふう、みんな冗談だから、石を投げつけないでくれ。まったく、このお茶目さん♪

まあ冗談はここまでにしとこう。

あれから4年が経ち、現在は中学3年生。体育大会も終わり、いまは冬真っ盛りである。

年を越せば、卒業式と入試が待っている。いまは12月31日で、もう直ぐ年越しだ。

今年は家族と年越しではなく、愛花、久美、深千夜の三人と一緒に年越しをすることになった。

といっても俺はテレビの生放送がある為、年を越してから会うこと

になっている。

俺の年齢的にあまり遅くまでテレビに出れないので、他の人より早く仕事が終わる。

まあ朝になったらまた仕事に行くんだけどな…。ふ、有名人も楽しやないな…。

既に生まれてきてから15年もたつ。

その間に色んな事をしてきたが、大体のものは優勝まで勝ち上がっている。

中学では色んな部活をかけもちでやっていたので、楽しい学校生活を送れた。

というか俺が出た部活の大会ではほぼ優勝や、入賞をしていたりする。

といってもそれは俺が努力した結果であり、別に能力のおかげだけとかではない。

現在の俺の身長は178?と大きく、身体能力も黒人並みの能力を持つ。

バスケットでは普通にダンクできるし、陸上では100mを10秒ぐらいで走りきる。

何度か高校新記録とか日本新記録を獲得したりしたことがある。世界では既に時の人である。

そんな俺の体は引き締まっており、腹筋がもう、ヤバイぐらいに割れていたりする。

成績とかは当然よく、中学では1位以外をとった事がない。もちろん小学でも…。

進学校はもちろん私立聖風高校である。そりゃあここまで来て、ほかの高校とか普通ない。

他の3人娘だが少し補足説明しようとおもう。

愛花はあれから少し大きくなったが、俺より20cmほど小さい。

しかし胸のほうが中々膨らんできて、揺れるのを見ると、もう……ふう、って感じた。

天然の方はまあわかんと思うが、けっこう重症だ。何度か告白されていたんだが、

愛花は告白自体に気づいていなかった。正直告白した男子は憐れむほかない。

久美は身長が随分と大きくなり、現在170cmほどになっているはずだ。

それに伴い胸の方も超大きくなり、体育のとき走っていると、ぶるんっ、ぶるんっとな動く様は、

本当は生きているのではないかと疑いたくなるほどだ。正直言っ
てブラジャーを着けようと、

あそこまで大きい胸は隠し切れない。そういえば空手は中学入学と
同時に止めてしまった。

やはり女子としては筋肉が気になるらしい。でも空手をやめて、少
し肉付きの良くなった体は、

ムッチリしており、それが逆にいやらしさを醸し出してきた。正直
たまらないッス。

いまでは久美に空手で勝つのも余裕になってきた。やっぱり男女の差
があるし、まず俺だしね…。

次に深千夜だがあまり変わらん。ただ身長が少し大きくなって14
5cmほどになり、

原作どおりの見た目になってきた事ぐらいしか言うことはない。まあいいか…。

「おつかれさまです」

俺は生放送を終え、現在は1時。ここから車で2時間ほど走ると、家に着く。

なので家と3人娘に今から帰る事を電話で伝えと、少し一眠りすることにした。

そして二時間後。

俺は家に着くと、とりあえず荷物を置くため家の中に入った。

すると、ドンドンドンと、階段を下りる音が聞こえ、妹である奈菜が下りてきた。

「ただいま！お兄ちゃん！」

「ああ。ただいま、奈菜」

現在奈菜は9歳。幼女から少女に成長し、恋愛など始めそうな時期だ。

といってもまだ小学3年生。まだまだ未熟なところもあり、可愛い妹である。

「また出かけるの？あのお姉ちゃん達のところに」

「そうだな。約束してるし…」

「むっ！今日はお兄ちゃんといたかったのに…」

まったく嬉しい事を言ってくれる。これが将来グレてしまったら如何しようか…。

呼び方がお兄ちゃんから、お前とかになるかもしれん。何としてもそれは防ぐべきだな。

「すまん。また遊んでやるよ」

「……うーん、まあ、許してあげる…」

「ありがとう」

そういえば言うのを忘れていたが、奈菜も子役として2年位前から出てたりする。

まあどうなるかしらんが、頑張っしてほしい。嫌になったら、やめてもいいしな。

「じゃあ少し出てくるから」

「うん！　いってらっしゃい！」

「いってきます」

俺はそう言う、待ち合わせ場所である神社へと向かった。

神社に向かうとそこには愛花、久美、美千夜の三人がいた。ここに来るまでに何度か俺に視線を送る人がいたがばれなかった。一応ばれないように変装もしてるし、帽子やサングラスで見えないようにしている。

「ほんとに遅い……」

そう怒らんでも…。まあ俺が遅いからしゃーないけどね。

「すまんすまん。でもあまり名前を呼ばんでくれ。バレルかもしれんから…」

「うん。それもそうだね」

「メンド臭いね、有名人って」

「本当にね」

まあそれが有名人だしな。気にしないで欲しいところだな。

「とにかくおみくじとかしようぜ！」

俺は3人の返事を聞くと、おみくじを引きに神社の横にある販売店らしきところに向かった。

「一回、300円です」

「はい、300円」

俺はお金を渡すと、おみくじのあの棒が入った入れ物を受けとり、それを横に振った。

ガラガラと音を立て、穴から出た棒を巫女さんに渡すと、結果の書いた紙を受け取る。

俺はそれをおそるおそる開いてみる。そこには…………、

「おおっ！！…でも結構、ハチャメチャだな…………」

結果は中吉。

学業がなんちゃらくとか色々書いてあるが、俺は気にしません。

ええ。なんか恋愛運のところとか、はちゃめちゃですが、気にしませんとも。

まあ俺のいいとして、みんなの奴を聞くとするか…………。

「で、どうだった？ちなみに俺は中吉」

「私は大吉だった！」

「私は吉だったよ」

「小吉…」

皆でおみくじを見せ合いながら、お互いに結果を言い合った。

「まあ悪い奴はいなかったな。いい奴は一人いたが…」

「えへへ。いいでしょう」

「なに言っただか、愛花は……」

「いつも通りだと思うけど…」

愛花まじでかわいいと思う。これは九澄にやるのは勿体無い。
というか全女子は俺が貰う。そりゃあハーレムでしょ、男としては。

「まあいいや。とにかく少し歩こうぜ」

「そうだね」

「何処行くの？」

「知らん。適当に歩いとけば、なんか面白いもんでも見つけるかもしれない」

「え、適当…」

「いいんだよ」

俺はそう言っていると美少女3人引き連れ、歩き出した。

周りの男どもは嫉妬の炎を燃やしています。彼女持ちは彼女に殴られています…。

すると愛花が俺の姿を見ながら話し掛けてきた。

「そういえばその格好、生放送で着てたのと一緒にだね」

「ああ。時間が惜しいからな。借りてた奴そのまま買った」

「それって買える物なの？」

「知らんな。買った事実があるから、買えんじゃね？」

愛花の疑問に答え、その後の久美の疑問に答えると、続けて美千夜

も話し掛けてきた。

「でも少し感動だね」

「なんで？」

「だってテレビに出てた人が、そのままの姿で目の前にいるって、早々見れないでしょ」

「普通見れないかもしれないが、別に感動せんでも…」

「まあまあいいじゃん。とにかく楽しもう!!」

久美はそういうと何故か走り出した。

「いやっ!! 走らんでも!!」

「わっ!」

「……………」

「ええっ!!二人も!？」

俺は一瞬、3人の後姿を呆けて見てしまったが、次の瞬間俺も走り出した。

まあ俺に勝てるわけなく、すぐに追いついたが…。

「……はあ…はあ…し、慎吾、速すぎ…」

「……う、うん、私もそう思う…」

「………(こくりっ)」

俺は疲れている3人を節目に、過去を振り返っていた。

「……にしても、早いな。もう中学卒業だ…」

「……そうだね」

俺の呟きに愛花が答える。

「慎吾も聖風だよね？」

「ああ。お前らもだろ？」

「うん。私のお父さんがいるし、皆で行く方が楽しいしね！」

まあまだ魔法の事は知らないんだろうな…。そういえば魔法親父ってすこしキツイな…。

少女ならともかく、おっさんはちょっと……。

「テレビのほうは如何するんだ？ やっぱ休み？」

「ん？ ああ。少しテレビを離れて、学業に集中しようと思ってる」

「そうなんだ…」

俺は久美の疑問に答えると、川沿いにある芝生に寝転んだ。

「とにかく頑張ろうぜ。と言っても落ちたら最悪だな、入試…」

「そうだね…」

「まあ落ちないと思うけどな、愛花もミツチョンも…」

「みんな頭はいい方だしね」

あんま関係ないけどね、成績。魔法力ですから。

俺達はその後、幾つか話しをしたのち、そのまま柊父の車で初日の出を見に行った。

天候は晴れており、随分と綺麗な初日の出となった。もちろん柊父と戦闘になったのは、言うまでもない。

続く

第3話 まだだッ!! まだ原作ではないのだよッ!! 諸君ッ!! (後書き)

次はたぶん原作だと思います。

にしても慎吾が随分有名人になってしまった。

予定になかったけど、利用できそうなのでそのままですけど…。

まあとにかく次もお楽しみに!!

第4話 ええ、入学ですね。わかります。

— — — — — side
慎吾

聖風よ！！私は帰ってきた……って、はい。すいませんでした。
ええ。まだ入試も終わってませんよ。帰るも何も、まだ入学もして
ません。

と、まあ今日がその入試の日なんだが、俺は急遽テレビ出演が決ま
り、特別に皆より少し遅れて、
入試を受けることになった。母、妹の二人は雑誌のインタビューが
入っているので手が離せず、
俺は家の車ではなく、一人バスで聖風まで行くことになった。

まあこんな感じに簡単に説明してるが、現在はバス停でバスを待つ
ている、のだが……。

「あ、あのっ!! 水森慎吾さんですよね!!」

なぜか見た目少女に正体を暴かれてしまった。
っ！かなんか見たことあるような、ないような……。

「な、何のことでしょうか。あははは……」

「私ファンなんです!! サインください!!」

俺の誤魔化しも酷いが、話を聞かない少女（仮）も酷い。
まあさっきから少女少女言ってるが、小学生か中学生程度の女の子
と思ってくれ。

「……うん。普通あまりサインは書かないが、特別に書こうかな？」

「キャ~~~~!! ありがとうございます!!」

にしてもこの子ほんとに誰だろ……。たしか空手の大会でいたような
気がするんだが……。

「あれ？これGYAK SATU（虐殺）のサインじゃん。彼らと

会ったの？」

「はい！！さっきバスから出てきたのを見かけて……」

あれ……？なんか既視感があるんだが……。絶対原作であつたぞ、この光景……。

「あの、失礼ですが、お名前は……？」

「あ、すみません。私、九澄 胡玖葉です。今年で19歳になります」

ほあ……！！！！kどじゃしhん c j ……ふう、少し落ち着いた。

まさかのロリ空手か。そういえば女子の部にいたし、あの強さは目立ってたからな。

俺も中学生で一般の大会に出て、なんか準優勝したが、その時見た胡玖葉の試合は白熱していた。

あれは凄いね。小さな体の何処に、あのパワーが隠されているんだか……。ロリ…侮れんな……。

「そうですか……。じゃあ胡玖葉さんへ、慎吾より、と書いときますね」

「はい!! 宝物にしますね!!!!」

いえ。それ大賀の入試案内ですから、早く届けてあげましょうよ……。

といってもマジックのアルコール成分によって、既に魔法文字は消えてしまっているがな。

大賀さまぁwwww……まあ入学すると思うがな。俺が妨害しない限りは、ね……。

正直、九澄大賀は俺の障害としかならん。邪魔なので俺的には排除しておきたい。

「まあそこまで言わなくてもいいですが……、それで胡玖葉さんは何故聖風の入試案内を？」

「…………あ!! 忘れてた!!!!」

…………え……。それは流石に可愛いそ過ぎる……。俺には関係ないけど。

「なにをですか？」

「…いえ、弟が聖風に試験を受けにいったんですが、どうやら入試案内を忘れたらしいので、それで…」

「弟思いなんですネ、胡玖葉さんは…」

「いえ／＼／＼…ただ頑張ってたのに、ここで落ちるのはちょっと……」

「……僕も聖風に受けに行くんです、入試」

「え？　そうなんですか？」

「はい。幼馴染達と一緒に受けようと、誓い合ったんです」

「へえ、あ！　バスきましたよ！　乗りましょう！」

「そうですね」

俺と胡玖葉はバスに乗ると、聖風高校に着くまで世間話を続けた。

が礼儀知らずとかではない。
つかか礼儀をもってしても、こいつに頭を下げることはない。

「で、なんかあったのか？娘ラブ変態親父」

「ああ。愛花が変な男に襲われてな…。変態シスコン野郎」

「…で、そいつは？このロンゲ堅物教師」

「…ああ。いまは保健室で寝てるだろう。このエロ軟派生徒」

「「……………」」

二人の間に火花が散る。そのまま十数秒がたち、俺達は動き出した。

「あああっ！？ぶっ殺すぞ、テメエツ！！！！」

「やってみろ！！撃退してくれるわああ！！！！」

俺達は互いに前進し、腕を振りかぶり、それが互いの顔に直撃する
ところで————

ガタッ。

「なにかありましたか？」

シュパッ。

「いえ。この先生に入試先の居場所を聞いてたところです（グリッグリッ）」

「ええ。道が判らないようでしたので……（グリッグリッ）」

俺達は人が現れた瞬間、何事もないよう答えを返し、下のほうでは足の踏み合いという激闘を、
やってきた人に見つからないように、隠れながら行っていた。

「？はあ、そうですか。では柊先生。その子を早く連れて行ってくださいね」

「はい。私も連れて行くところでしたから（ガンッ！！）」

「そうですね。早く行くことにしましょう（シュパッ！！）」

俺達は勝負に区切りをつけると、試験会場に向け、歩き出した。
くそっ！今日も勝負がつかなかったか……。あのおっさんやりおる
な……。

その後試験を受け、案内書の最後のページの答えを、無事に答えられた俺は、

[illegible]

入試から幾日かの日が過ぎ、とうとう私立聖風高校の入学式。入学式までの日々は、3人娘と遊びに行ったり、高校に入り芸能活動を一時休む事を、ファンの皆様に伝えたり、その為の準備をしたりと、他にも色々あったが、今日は入学当日。

正直俺は有名人であり、周りからの視線は痛いほど浴びている。し

……ZZZ…ZZZ…ZZZ…。

「……きて……おき……」

……う……うん？…なんだ？…誰だよ…うつせえな……。

「……きろ……し……ご……しん……慎吾……！…起きろ……！」

「ぐわっ！？な、なんだ……！」

「きゃっ……！」

俺は後頭部の柔らかい感触と、腹筋にあった衝撃に目が覚めた。

目を覚まし、目の前には久美。そして頭を右に回し振り返ると、後ろには愛花。

どうやら柔らかいのは愛花の胸、腹筋の衝撃は久美の右手でのボディ。

別にあまり痛いわけではないが、突然の衝撃は体がビククリしてしまった。

まあ後ろにいた愛花に俺がビックリした勢いで、寄りかかったって
かんじかな？

「どうしたんだ？」

「どうしたって…もう放課後だぞ？」

「ええ！！マジで！！」

まさか寝て起きたら放課後とは…。俺…恐ろしい子……。

まあ前にも、テレビ撮影の後に眠すぎて、一度寝たら何故か次の日
だった、てのがあったな。

普通に聞こえるかもしれんが、気付いたら夕食食べて、気付いたら
風呂入ってて、

気付いたら宿題して、気付いたらそのまま就寝、イエイ朝だぜ！！
みたいな状況だぞ。

怖くて、眠れんわ！！なんで寝てんのに、行動してんだよ！！普通
動く前に起きるわ！！

「なんか普通に自己紹介とかしてたよね？ミッチョン」

「そうだね。目も開けてたし…」

「こわっ!!寝てるのに、目開けてるとか、こわっ!!」

「まあいいじゃん。別に困ることじゃないって」

「そうだね。なんか便利そうだね」

「確かに…」

「……あれ？俺がズレてるのかな……」

……まあいいか。とにかく帰ろう。それが一番。

「とにかく帰るか。やることもないし…」

「みんなで帰るのも久しぶりだね」

「そうかもね」

「うん」

「ほら、そんな事言ってる置いてくぞ」

「あ！まってよく。慎吾くゝん」

「ちよっ！愛花！かばん、かばん！」

「天然だね…」

「あう……」

……ふう。とりあえず原作開始か？これからどうなるやら……。俺はこれから事に一抹の不安を感じながら、家を目指し歩いていた。

第4話 ええ、入学ですね。わかります。（後書き）

とうとう原作が始まりそうです!!

次はどうなるか、正直作者もわかりません。

その場の勢いとかでいろいろ変わってくるので、お楽しみに!!

第5話 ふっふっふ。甘いな、九澄…。（前書き）

今回は作者が暴走して下ネタオンパレードになってしまった。

正直何処まで書いていいのかわからず、結構やっちゃったかなと思った。

でも作者てきにはまだまだ軽いと思うので、そんなに期待しないほうがいいかもしれない。

ではどうぞ。

第5話 ふっふっふ。甘いな、九澄…。

— — — — — s i d
e 慎吾

とうとうやってきた九澄大賀、来襲日…。

どうするか悩んでいたが、結局聖風に入らせるのを妨害することにした。

現在は昼休み。4階廊下の窓から見ると、聖風の外にある道路に九澄らしき男がいるのを発見。

本来原作で九澄を聖風に巻き込むはずの柊父はその近くにいない。何故なら、原作ではないはずの放送で職員室に行ったからだ。俺の所為かは知らんが、

ラッキーだと思える。これで聖風に入るのは不可能だし、俺の計画をすすめることが出来る。

俺はまず近くにいる先生を探し出す。すると廊下の角から百草紀理子先生がきた。

———百草紀理子ももく りし。年齢不詳。

聖風高校教師であり、カールのかかったロングヘアで眼鏡を掛けた、スタイル抜群の美女である。

原作の中の魔法試験では第二関門の試練を与える役目を担うことになる。

俺はそろそろ先生に後ろから近づくと、思いっきり抱きついた。

「きゃっ!!」

「せーんせい! 今日超巨乳が最高ですね(ふにふに)」

「あんっ／＼／＼し、慎吾くん。こんな所でやめて…」

「ここじゃなければ良いんですね? (ふにょん)」

「んんっ…。そ、そういうわけじゃないけど……／＼／＼」

こんな事をしているが、すでにちゃんと人のいない準備室へと入っている。

というか、いまはこんな事をしている場合じゃない。早く事を進めないと…。

「まあ今日はここまでとして、連絡したいことがあったんです」

俺はカクカク、シカジカで説明すると、いま柵に上って中を覗こうとしているのか、よくわからないが超怪しい人の九澄を二人で見ていた。

「そうね……まずは学校長に報告して、それから決めましょう」

「それもそうですね。じゃあ行きましようか…」

俺は最近覚えた『限りなく透明な“俺”（クリア・クリーン）』で姿を消すと、

先生のお胸を揉みながら、学校長室に向かって歩き出した。

この魔法は愛花が本来使うものだが、俺が魔法を覚えてから改名した。

だって私って言わないし、俺って言うほうが普通だと思ったからな。

ちなみに今日の昼休み。

廊下では何かを我慢するように歩く紀理子先生の姿が見られたそう

だ。

その姿は何故か随分と色気があり、遭遇する男子は自らの息子をお

つたてたそう

だ。

その後各階の男子トイレでは混雑が見られたようだ。何故かはご想像にお任せしよう……。

竄しましょうか」

「わかりました」

「一応暴れるかもしれないので、誘導した後、魔法で捕縛、それから記憶を弄ってください」

「では、いってまいります」

俺は学校長に報告をするのを紀理子先生に任すと、授業を受けに教室に戻っていた。

今までの会話は紀理子先生につけた盗聴機によって聞いていた。

改竄もしてくれるとは、これで手間が省けたな。もし愛花のことを覚えてたら、

また聖風に来ると思うしな。そうだったら俺が記憶を消すことになっていた。

本来つかっちゃいけない魔法だが、知らん。九澄が愛花を付回すから悪い。

「どうしたの？ 慎吾くん」

おっと何時のまにか放課後だったらしい。

ちなみに席順は俺が基点に右に愛花、左に久美、前に深千夜。

さらに後ろに委員長下田、右前に皆口、左前は桃瀬、右後ろに氷川、

左後ろに出雲ときている。

その周りに他の女子が陣取っており、憐れな男子どもは開いた席に座っているという状況だ。

正直これは誰かの陰謀をかんじる。というか女子の陰謀をかんじる。主任である柊父がいるので普通はできないと思うが、女子の圧力に負けたのだろうか……。

「いや、なんでもない」

「今日はどうするの？皆で帰る？」

「そうだな。じゃあ…《1年C組の水森慎吾君、すぐに職員室前にきてください。繰り返します…》」

……九澄のことかな？8割方そうだろうな。声が紀理子先生だったし。

「ありやりや。何かやったのか、慎吾」

「いや、昼に少し紀理子先生に頼んだ事があってな。多分それだろ…」

俺は横にいる久美からの質問に答えた。

どうやら聞いたところ、無事記憶を改竄したらしい。

簡単な質問の後、職員で審議し、どうやら魔法のことは知らないが一応改竄することになったという。

まあ正直記憶のない九澄はどうでもいいので、俺の用事を済ませることにした。

「じゃあせーんせい。行きましようか。時間も少ないですし…」

「え？」

俺は先生を人気の少ない準備室へと連れて行くと、襲った。

そこでは30分ほど、机が軋むような音が響いていた。

先生の喘ぎ声は俺のマグナムを回復させたが、時間もないので直ぐに済ました。

「じゃあ俺待たせてるんで行きますね。また明日」

「……ふあい、ごしゅじんさまぁ……」

正直いまの言葉だけで俺の息子は元氣100倍だった。

俺は無理やり息子を静めると、待たせている3娘の元へと向かった。

「え?…うゝん、まあ別にいいよ。少し体動かしたいし」

「よっしゃ!じゃあ帰ろうぜ! (計画どおり…)」

俺は夜神ら〇と並みのあくどい顔を浮かべると、帰り道を歩き出した。

「あ、ああん、しんご！しんご！あ、あ、ああん、あああゝゝゝ
ッ！！！！！」

てへっ♪襲っちゃった♪

最初から襲うつもりだったけど、汗かいた久美の体とか少し見える
谷間とか、

いろいろ見ちゃったら戦う最中に空手なのに寝技に映っちゃった。
まあまあ落ち着いて落ち着いて。今回は下ネタばかりだけど、い
いじゃないか。

だって男の子だもの。高校生になったら性欲も持て余すし……。

それに有名になりすぎて、最後までいける女の子はいないことなか
ったけど、

けっこう気を付けないと、妊娠とかさしたら報道されちゃうし、あ
まり手を出せないんだよね。

「…はあはあ……ねえ、しんごも……きもちいい？」

「ああ、最高だよ」

「それなら……うれしい／＼／＼／＼／」

顔を赤く染め、少し幼児化した久美は最高に可愛かった。

俺はそれを見て元気になった息子を久美に見せると、再び動き出し
た。

結局俺はその後3時間ほど運動し、時間を見て今日はもう遅いので久美を泊めることにした。

ちなみに家は高校入学と同時に一人暮らしを始めたので、俺と久美以外に人はいない。

空手をしていた場所は、家の横にある道場。ちなみに家とはマンションとかではなく、

普通に一軒家である。つか、武家屋敷。メイドもいたりするし、全員すでに襲っている。

妊娠はしていないので、安心だ。いまは俺と久美以外、外に外出させている。

なのでその後お風呂で何試合かした後、ベットで朝近くまでハッスルした。

俺の息子はそれでも元気で、絶倫すぎる息子に俺は少し呆れた。

続く

第5話 ふっふっふ。甘いな、九澄…。（後書き）

次回は多分真面目に書いていくと思う。

でも時々下ネタとか入れていくと思うので、期待しててね。

まあ漫画とかでも下ネタとかは重要だよな。

少しぐらい入れてもいいよね。

第6話 パーティー結成らしいですよ、奥さん。

— — — — — side
慎吾

某日、早朝。

俺は早く魔法を覚えるため、朝から学校の屋上にきて魔法の練習、
もとい訓練をしていた。

俺のプレートはもちろんゴールドプレート。初めはクラス、いや学
校中で随分と騒がれた。

そりゃあ入学始めにゴールドを持つ生徒など、奇跡に近いだろう。

まあ神のおかげなんだが…。

なぜそんな俺が魔法を練習しているのかというと、やはり早く色ん
な魔法を覚えたかったからだ。

色んな事をしてきた俺だが、魔法など魅力的なことはしたことがな
い。やはり心躍るってもんだ。

「『蹴球遊戯！！！』」
ファンタジスタ

この技は九澄命名の魔法だ。原作では練習時でしか使われていなかったが、これは役に立つ。

魔法を操るに当たったのコントロールを制御する練習になるし、これが一応攻撃として使える。

なんか名前が少しどうかと思うが、その辺は新たに考えるのも面倒なので変えることはない。

俺はボールを上下左右に動かし、ある程度練習を続けると魔法解除マジックアウトした。

「…ふう。こんなもんでいいかな…」

最近蔵書室に行って、新たに魔法をインストール入力したりしている。

物体強化魔法、合成魔法、物体操作系魔法などいろんな魔法が聖風高校にあるが、

俺はその中から使えそうなものを選択して、入力している。

といっても容量が最大クラスのゴールドプレートを使っているので、大体の魔法は覚えていると思う。流石に全部は無理だと思うが…。

魔法は新たに自分で考えることもできるので、結構面白い。

「そういえば……」

「ま、こんな朝っぱらから練習が必要なのは、俺と同じでデキの悪いヤローなんだろうけど…」

そう俺は魔法のデキが悪い。ふ、そんな俺を笑ってくれ……。

「魔法ってのは自分家で練習できねーのがツレーよな。よーやく一つ覚えたのが…」

俺は左手に財布、右手にプレートを持つと、魔法を発動させ、それを近くにある鉄製の物に投げつける。

「物を磁石化するだけの魔法」

ポトツ

「（しかも有効時間は30秒……（泣））」

冗談じゃねーぜ。

こんな程度じゃヤツを見返すどころか、下手すりゃ学校にも見切られちまうカモだぜ。
どーしたもんかな……。。

— — — — キュルルルルルル……

ん？ 何の音だ？

ズドォー——ンッ！！！！

「ん？こんな朝っぱらから誰だ？」

俺は木の陰にいてであろう人間に正体を聞いてみた。

すると出てきたのは、まさにエロを体現するような冴えない男子生徒だった。

「あれ何だ？水森じゃねーか。びっくりした」

どうやら相手は俺の事を知っていたらしい。

俺もこいつの事を見た気がするでもない。というか知ってますけど……。

「ああ確か同じクラスの……」

「伊勢、伊勢カオル。俺の事なんて覚えてねーよな」

意外に発言が暗い。まあ正直どうでもいいけど…。

「しかしスゲー魔法。噂どおり怪物なんだなおめー」

「まあ練習してたんで……。あと怪物いうな」

すると伊勢は疑問に思ったのか、問い掛けてきた。

「練習？何でお前みたいなの？俺みてーにデキの悪いやつならともかく」

九澄は架空のゴールドだったから誤魔化すしかなかったが、俺は実際にゴールドなので理由は簡単だ。

「別にデキる、デキないが問題じゃない。大きな力を持つからには周りは期待するだろうし、俺には力も持つ者としての責任がある。それに努力はいつか報われる。無駄ではない」

「アハハ、カックイーな、お前。やっぱ大物は言う事が違うぜ」

まあ適当に言っただけだけど……。これで納得してくれるなら別にいい。

「すまんが、俺まだ用事あるから」

「ガンバレよ!!」

俺はトイレトペーパーを使い、再び屋上へと飛び上がった。

なにやら伊勢が考えていたが、まあ俺を協力者にできないか考えてただけだろうな。

俺はその後幾つかの魔法を練習すると、1年C組の教室へと向かった。

[illegible]

そしてHRの時間……。○

柁父がいないので、委員長が前に立って話を進めている。

「先生がいませんが、HRを始めたいと思います」

そこで一旦委員長はクラスを見回す。

「先生からお話があったように、魔法授業も基礎期間が終わり、来週から本格化します。

通例通りこれからは班編成^{チーム}で授業を受ける事になります」

そこまで伝えると、クラス内はなぜかソワソワし始めた。

なんとなく周りから視線が集まってきている気がする……。正直、気のせいでありたい。

「各班、男女5人程で集まってもらいます。得手、不得手をカバーし合える友達と組むと、

成績に有利です。よく考えて仲間を決めてください。ではこのH Rの時間、各自……」

――――ザッ!! ↑皆が立ちあがる音

――――ガタッ!! ↑椅子が床に擦れる音

――――バツ!! ↑俺が逃げ出す音

————ガシッ!! ↑俺が確保される音

「水森くん!!」

「水森くん、いっしょになろ!!」

ちなみに周りは女子しかいません。

男子どもは女子にふっ飛ばされ、教室の床に倒れていますが、なにか?

男子ども、ざまあwwwクラスの女子、いや学校中の女子は全員、俺の女にするから。

おこぼれ位ならあげてもいいけど、俺の奴隷になれよ、このヤロー

……www

まあ冗談だけだな。俺が女子を逃がすわけないだろ。好みじゃなかったら、手出さないけどな。

「同じ班になろうよ!! 前から友達になりたかったの!!」

「いいえ!! 私達と組んだ方が特よ!!」

俺は女子にもみくちゃんにされながら、女子の胸やお尻、体中を触りまくる。

徐々に女子の顔が惚けてきてるのが、目に映る。感じ始めてる子もいるようだ。

「ずるいわよ!! あん、自分のところに、んん、

水森くん入れようと、やん、してるんでしょ!! やあん／／／／／
／

「あ、あなただって… ああん／／／／／」

少しずつ感じすぎて立てなくなってる子もいるようだ。

でもまだ何人も女子は周りにいる。男子は俺に嫉妬の視線を送ってくる。

「慎吾、えらい人気だな」

「そりゃ慎吾がいれば有利だもん」

「私たちは同じ班でいいよね」

愛花たち3人は、俺の周りに人が集まって来る前に避難している。そんな愛花たちを男子どもは、愛花たちが俺に興味がないと勘違いしたのか、
必死になって誘っているが、久美がそれをぶっ飛ばしながら断って

いる。

俺も正直面倒になってきたので、離れてもらうことにした。

「シャラープッ！！！！少し離れてくれ！！！」

――――バツ！！

離れるのも早かった。

多分俺に嫌われるのがダメなんだろう。しつこい女は嫌いだしな。するとタイミングを計ったように伊勢が近寄ってきた。

「そーだぜ。水森の意志がまず先だろ、な？」

「伊勢か」

どうやら伊勢は緊張しているようだ。

俺は伊勢のプレートが、俺の左手に吸い込まれるのを無視する。

「水森といっしょになりたいやつは手ェ出せよ。水森が握手し返し

たやつが同じ班だ」

「それはこまったな（棒読み）」

すると俺の手は磁石のように、伊勢の右手に吸い込まれていった。

「うわ——マジ!?俺と組みたいって?ラッキー!!」

「じゃあよろしくな（棒読み）」

正直誰でもいいしな。こいつはこいつで面白いし…。でも女子はそうでもなかったらしい。

「げっ!!ウソ、伊勢といっしょ?」

「やーん、じゃあ同じ班になれなーい!!」

「私も伊勢はイヤ!!」

伊勢、嫌われすぎ。

判ってるけど、一応聞いところ。

「何でだ？」

「だってそいつ超エロ野郎なんだもん!!」

「1年女子はほぼ全員一回はさわられてるのよ」

私胸つつかれた、私はお尻さわられた、など色んな声が聞こえてくる。

ちなみに俺も体中触るが、大体の女子は顔を赤くしたまま俯く。

「好きにしても…いいよ?」とか言ってきたりする女子もいる。

そういう子は準備室とかに連れこんで襲う。

俺と伊勢ではこんなにも扱いが違う。イケメンとフツメンでは格が違うらしい。

「人聞き悪いな、誤解だって。たまたま、あたっちまってるだけだっつて」

「誤解でも何でもあんたと同じ班じゃ、何されるかわかったモンじゃないわ!!」

伊勢も無駄な抵抗をしてるが、女子達はブーブー言っている。

「あー」

すると愛花が話し掛けてきた。

「どうした愛花？」

「私達でよかったらいいけど？」

「「愛花！！」」

久美たちには言ったのだろうか…。

俺が久美たちの方を見ると、伊勢のほうを見て嫌な顔をしている。

「いいのか？」

「いーじゃない。楽しそーだし」

理由が適当だな、おい。

「まあ愛花が言うならいいけど、慎吾もいるしね」

「それもそうだね…」

というか伊勢が愛花の胸を突こうとしている。
俺の女に手を出すとは、お前勇者か？

「つーことで、ふっ飛べ」

————バゴオンッ！！！！

「ぎゃふんっ！！！！」

初めてぎゃふんという言葉聞いた気がする。

「なに触ろうとしてんだ、この野郎……（もみもみ）」

「し、慎吾くん！？揉んでるのは、慎吾くんだよ、んん…あ、あ
ん…やあん…あんっ！！」

そこに胸があったからさ……！みたいな感じでよろしく。

「慎吾……！何してんだよ……！／／／／」

————バシッ！！

「イテッ……！そ、そう怒るなよ……（ぼそっ）今夜も家で襲ってやるから……」

／／／／／／／／

耳元にぼそって言ってやると、久美は赤くなって、固まってしまった。

どんだけ下ネタに弱いんだよ。あんなだけ何回も襲ってるのに……。

「まあ愛花もすまんな」

「……もー…今回だけだよ？つ…次は怒るからね!!」

今回だけとかありません。次も襲いますとも、ええ。
それにしても怒り方が可愛いな、愛花は…。

その後、班の決まった俺達は、とりあえず他の班が決まるまで待つ
とくことになった。

続く

第6話 パーティー結成らしいですよ、奥さん。（後書き）

まさか地震が起ころとは…。自分は被害を受けてませんが、

関東方面の方は大変でしょうね。テレビで見ましたが津波がこんな
に凄いとは思いませんでした。

これから大変だと思いますが、頑張っしてほしいと思います。

第7話 いやいや、野外らしいですよ。

現在は休み時間。

委員長である下田明歩は、班編成の書いてある紙を、職員室にいる
柊父の元に届けにきていた。

委員長は班編成を纏めた紙を渡し、柊父は内容を確認するため目を
通し始めた。

しかし柊父の視線がある一ヶ所にくぎ付けになる。そう6班のメン
バーである。

「何だ……？これは」

柊父の顔には怒りが溢れている。

「！？…あの、今日決めた、魔法授業の班編成ですけど…」

それを見て委員長は、あわあわ言いながらも、怒る柊父に説明する。

「どうして、柊（娘）と水森が同じ班になってるんだと言っている

何故いきなり呼ばれたか知らんが、ぶっ飛ばしてやろうか…。

「なんだよオッサン……急に呼び出して……」

「おめー、娘の班に入るたあフザケてんのかゴラァ!!。どーゆうつもりか言ってみろ、ああ？」

どうやら柊父はお怒りらしい。

手をカトウーン・ハンドで大きくしてやがる。こいつ俺を殺るつもりだ…。

と思ったら、俺に女神が来てくれたらしい。

「お、お父さん!!」

「愛花」

柊父は呼んでない愛花が来たことに驚いている。

「学校にいる時は、生徒と教師なんだから…余計な干渉しないでよっ」

「これは教師として言っているんだ!! ろくでもない仲間を作ると、自分も腐っていくんだぞ!!」

まったく親バカ過ぎる。ここまではっきり言う奴もいないだろう…。

「お前は真面目で優秀だ。こんなバカと一緒にいては…」

「ばば心配でちゅ——」。言う事きいてくれないと、泣いちゃうでちゅ——」

「……………」

「親バカにつける薬はないんでチュ——」

「ブブツ!!」

一応あれは面白いと思ったので、俺も九澄を真似して言ってみた。柊父はいまにも爆発しそうだ。というか愛花ここで笑うのは、柊父に失礼だと思うぞ、うん。

「もう、ほんと困るんだから……。ごめんね。お父さんってほんと心配性で……」

「わかってるさ。昔から何度も会ってるからな……」

「学校では怖いイメージだけど、家ではあれで優しい人だしね」

「つーか、娘に甘いだけだと思うが……」

過保護すぎるぞ、あのオッサンは…。

というか、あそこまできっぱり言う教師なんて早々いないぞ。

「慎吾くんはそんなに不真面目じゃないと思うんだけど」

「そーか？結構不真面目だと思うけど……」

「とにかく同じ班になれたんだし、試験いっしょにガンバローね」

「ああ。そうだな」

にしても愛花は一つ一つの動作が可愛いな。

いつ襲おうかな。でもなんか愛花には純粹に生きて欲しいし…。

ま、いつか襲うと思うけど…。俺が考えてると、後ろから伊勢が肩を組んできた。

「そーそー、ガンバローぜ、相棒!!」

「伊勢か」

何故いる……。

「班の事で呼び出しくったって聞いて、様子見に来たんだ。良かったぜ、変更されなくて」

お前とは組まなくても良かったけどな。

「ゴールドPの水森がいる、いないで、大違いだもんなー」

人任せか、このヤロー。といっても、お前にも頑張ってもらうけどな。

俺が考えている間も、伊勢はなぜかメラメラしている。

「水森がいる以上、俺らの班は魔法試験は一番取らねーとなー！！他のやつらみんな、ぶっちぎってやろうぜ」

「まあ俺的には一番なんか、どうでもいいけどな」

面倒だし…。

「そんなやる気でどーすんだよー！！」

お前はどこそぞの熱血か。

「絶対一番になるんだよー！！何がなんでもー！！」

「はいはい。そーだねー。がんばろーぜー（棒読み）」

これで流してくれると嬉しい。
すると黙って聞いていた愛花も、話に加わってきた。

という事で伊勢の実力でも知ったかと思っただが……、

「きゃ——んもー伊勢バカ!!」

「佐倉ア、ちょっと肉ついたんじゃない?」

マジで!? じゃあ俺も……。

「あん!! ……やあん、ああん、み、水森君? ……も、もっとお」

ええ、じゃああの部屋へ行きましようか、佐倉さん……。

——— 慎吾、佐倉運動中

ギシギシ、アンアン、ギシギシ、アンアン、イ、イク~~~~つ！
！！。

——終了

「ふう、じゃあ俺、行くから…」

「……………うにゅ…」

どうやら疲れたらしい。俺も少し腰が……。

とりあえず俺は佐倉を置いて、教室に向かうことにした。

すると向かう途中で、伊勢がボロボロの状態で廊下に倒れていた。

「どうした、伊勢^{イセ}」

——ゲシゲシ

「……………」

蹴ってみたがどうやら気絶してるようだ。

俺は面倒なので、そのままにしておく事にした。

立ち上がり廊下の角を見ると、巨乳がいた。

いやあれは『G』の旋律、B組時田！！風でも揺れそうなあの胸は、思わず触りたくなる。

————モミモミモミモミ……

「ああん／＼／＼も、もう揉んでるんですけど…」

「おやおや」

じゃあ行きましようか。相変わらず顔の見えない時田さん……。

「え？」

——再び運動中

モミモミ、ギシギシ、ニユルニユル、ギシギシ、アンアン、イ、イ
ク~~~~ツ!!!!!!

——終了

「そろそろ時間もないし、行くな？時田……」

「……ふあい……」

時田も疲れたようだ。

それにしてもあの胸は最高だった。ふにょふにょんだ。

多分久美より普通にデカイと思う。久美も大きいけど、時田のほうが
大きいと思うぞ。

二人を呼んで、あの大きな胸に挟まれてみたい…。

「まあ色々あったんだよ…」

時田ですね、わかります。

「2年の伊勢っていや、魔法力すごい高いんだろ？私ら1・2年校舎じゃ、1番の実力者って噂だし」

久美は伊勢兄の事を、少し知っていたらしい。
それに愛花と深千夜が続く。

「2年初めで、もうシルバープレート持ってる人って、かなり少ないんですよ？」

「普通の人より、1年弱早いペースって聞くけど…」

そこで伊勢が反論する。

「けっ！！た…たいした事ねーよ、あんなヤツ。ここにゴールドP持ってる、1年がいるじゃねーか」

「「た、確かに!!!」」

「（そりゃそうだが、伊勢よ…お前にそれを言う資格はねえよ…）」

だって伊勢自身は、シルバープレートでもなんでもないしね。

まあこいつも結構、優秀な方だと思うがな…。

「つか、何でお前らそんなに仲悪いんだ？家でどうしてんの？」

暇なんで、色々話を振ってみる。

「家って…一緒に住んでねーし。あいつは出来がいいから、高校入ると同時に一人暮らし認められてさ」

伊勢は頭の後ろで腕を組みながら言う。

「俺は3時間かけて通ってんのによ。あいつはいつでもそーだ。いい思い一人じめしやがってよ。」

ああ見えて、昔から勉強も、運動も何でもソツなくこなすヤツで、いつも俺は比較される身さ」

伊勢は少し遠くを見ながら、続ける。

「対抗意識で、聖風高受けたんだけど、そのお陰で覚えた魔法でま
で、差アつけられてたまるかよ」

正直兄弟なんてそんなモンだと思うがな…。

まあ勝手にしといて欲しいわ、兄弟ゲンカなんか。

俺と奈菜はしたことないからな、兄妹ケンカ。

「魔法なら慎吾くんが、手ほどきしてくれるわよ」

愛花は名案だよね、って感じで皆に言う。

正直面倒です、はい。

「なんたってプレートレベルはお兄さんより上なんだし、
私達だって同じ班だし、力になるよ。ね！！！慎吾くん」

ぐわあああああっ！！！！そんな頼み方したら、断りきれねえ！！！！
ぐっ！！！！愛花……なんて恐ろしい子っ！！！！

……と、冗談は置いといて、元々断る理由もないし、いっちょやり
ますか！！！！

「そうだな。皆で強力すれば、直ぐに上達するさ」

俺が言うのと伊勢は、俺の両手を握って感動している。

「クォー、さすが親友!! いいヤツだぜ!!」

「あ、ああ（いつ親友になったんだ…）」

その後伊勢は俺の手を離すと、愛花達の方へと走り出す。

「そしてありがとう、君達……!!」

——バゴオン

「魂胆、見え見えだってーの…」

「……やっぱり?」

しかし久美の蹴りによって、伊勢は大岩へとふっ飛ばされた。

「まったく、伊勢はバカだな」

「ああ、気持ちわかる。こういった野外授業は、ついムダ話をしてしまうものだ…」

「だから俺の後ろに立つな、オッサン……変態か？」

「……一度、死んでみるか？」

俺は柊父が動き出すとともに、伊勢の方へと走り出す。

「無駄だ!!」

柊父は魔法を発動させ、木の枝を操作し、俺を捕まえようとしてきた。

「身代わりの術!!」

「…へ？」

俺は伊勢の近くまで来ると、伊勢を背負い投げの用法で、迫り来る枝に向かってぶん投げた。

「ノオオオオオオオオオオ………！！！！！！」

伊勢の絶叫が聞こえてくるが、俺は気にしない。

「ちっ……。まあ今日のところは、ここまでにしといてやる」

「はっ！！次も防いでやるぜ！！」

俺と柊父は睨みあうが、互いに踵を返すと離れていった。

「いいから、早く助けてくれエエエエエツ！！！！」

ちなみにそうやっている間も、伊勢は木の枝によって振り回されていた。

「もう一度言うぞ」

そして伊勢が解放された後、魔法授業が始まった。
伊勢は片隅で倒れている。ざまあ W W W

「この時間は一つの課題をクリアしてもらおう」

柊父は確認するように、説明を続ける。

「基礎学習で、物に動的变化を加える技術は習っているハズだ」

すると柊父はプレートを取り出すと、地面にある少し大きい岩に向かって投げる。

「今回はその応用で、一塊10kg弱の岩を浮かしてもらおう」

その岩を胸辺りまで浮かすと、柊父は説明を続けた。

「時間は30秒間。この授業時間が終わるまでに、各班5人が全員クリアできたら合格とする。わかったな」

そこで柊父は一旦息継ぎのために、説明を止める。

「浮かせる方法は一種類ではないぞ。風圧・引力・重力制御、あるいは空気を固めて、

その上に乗せてもいい。各自身についている魔法で対応してもよし。

魔法書の魔法をいま入力してもかまわん。オイ、水森!! ちょっと手本見せてやれ」

大体説明を終えると、魔法を解きながら柊父が俺に言ってきた。

「だが断る！！！」

てへ♪断っちゃった♪

「殺すぞ…（ぎりぎりぎり）」

「イタ、い、痛い！！やめて、ぐお、いたたたた、や、やるから」

「よし。早くやれ」

「…ふう、痛かった。新しい世界に目覚めたらどうすんだ、このヤロー…」

まさかアイアンクローされるとは思わなかった…。

すこし新たな世界に旅立ちそうになったが、ギリギリ踏みとどまった。

俺の眩きに周りの女子の視線が、怪しくなったが気にしない。

「まあやるか……『重力反転』グラビティ・リバース」

これは俺の新魔法『重力反転』グラビティ・リバース。

重力を反転させ、物体を浮かび上がらせる魔法だ。

ただ重力を反対にさせるだけなので、そんなに難しい魔法ではない。コントロールが必要だが、そんなもん適当にやっとならば、いずれ出来るようになる。

俺は胸辺りまで浮かび上がらせ、30秒間待った。

ちなみに九澄みたく大岩ではなく、普通の大きさの岩である。問題があっても困るし、別にそこまでやる必要が俺にはない。

「よし、30秒経ったな。…よし、各班練習始め!!」

——ワイ、ワイ

——ガヤガヤ、ガヤガヤ

——ガン、ガン

「ダメだー。少しぐらいなら浮くけど、10?は重すぎだぜ」

「30秒静止って、キビシくない？」

周りは既に練習を始めたり、魔法を入力したりとガヤガヤしている。
しかしやはり普通の人では、30秒静止は厳しいらしい。

「ねえ慎吾くんってば、聞いてる？」

さすが愛花、可愛いぜ……グハァ（吐血）。

「…えっと、何だっけ？」

「伊勢くん以外はみんな、今回の課題に合った魔法持っていないみたいなのよ。」

「やっぱ新しい魔法入力した方がいいかなって…」

「ああ…まあそうだな…皆はどんなの使うんだ？」

俺がそう聞くと、久美から説明し始めた。

「自由選択の魔法は色々あるけど、個々の性質と相性のいい魔法を選ぶのが基本だからな」

久美はそう言うと、髪から髪留めをとり巨大化させた。

「私は機能増加型パワーアップが合うんで、物の大きさや、パワーを上げる魔法をいくつか」

次に伊勢。

伊勢は石を磁石化させ、鉄パイプにくっつけている。

「俺は物を磁石化する魔法しか使えないんだ。ま、今回は上手く使えそーでラッキーだけど」

深千夜は、人形に伊勢の髪をつけて、操る。

「コントロール操作。使い慣れてるのは、このコで他人を少し操作する魔法」

「ぎいやあああ！！！」

あ、死んだ…。

最後に愛花。

愛花は木に魔法を発動させ、木をカラフルにした。

「私はアレを除くとイメージ型？視覚的な変化を作る魔法が好き」

ちなみにアレとは、『ボイスワープ声震砲』の事である。

前に一度愛花に聞いた。柊父が身を守るために覚えさしたらしい。

「まあ全部確認したが、やっぱり良いのはないな」

「なのよね」

「じゃあ女子3人は新魔法入力しょ？のんびりしてると詠唱する時間なくなるよ」

深千夜は魔法書をパラパラ捲りながら言った。

「空中浮遊の魔法となると……この辺かしら」

「皆同じじゃツマンネーよな。私コッチ」

「じゃ、私はコレ」

ちなみに上から深千夜、久美、愛花の順番である。

さてここで魔法の入力に説明しよう。

魔法の入力とは。

教科書として各自に配布された基本書や、蔵書室に保管された魔法書。

それに記されている秘呪文をMPマジックプレートに対して、詠唱することで行われ

る。

一度本人の声紋で入力された秘呪文はプレートに記録され、次回からは魔法名を呼び出すだけで、

自動で唱えられ発動する。魔法によってまちまちであるが、強力な魔法は秘呪文も長く、

詠唱に数日を要するモノもある。また入力時に詠唱者が霊的に高次の集中力を保っていると、

魔法自体の精度が高くなる。同じ魔法でもより効果が高く発動できるのだ。

ゆえに入力時は各個が最も高みにいる状態で行うのが理想である。

ちなみに俺の場合、役者・タレント・アイドルであるため、集中を長時間高めることも可能である。

普通の人間ならある程度集中すると、絶対に集中力が下がっていくのだが、俺は一味違う。

長年鍛えられた俺の脳は、少しだけだが集中力の持続力が人間離れしている。

流石に2、3日続けることは無理だが、1日ぐらいなずっと集中することができるだろう。

そして何故俺がこんなにも、考えることに集中しているかと言うと、ただの現実逃避だ。

だって久美の入力が激しいし、深千夜の入力なんてある意味ホラーだ。

久美の入力は夜の運動よりも激しいかもしれん。何故か興奮してい

るようにも見える。

———ポンポン

「あん？」

何故か伊勢に肩を叩かれた。え？あっち？何があんだよ……。

「(ぶつぶつ) ……、あゝん、詠唱って苦手…クチ回らないんだもん。(ぶつぶつ) ……」

……(ガッ) ヒギっ……」

?????

「イヒヤーイ、ヒハハンヒヤッヒヤ——…(痛い、舌嚙んじやつた)」

ヒュハラ、ヒライ(だから、きれい) ハフハヒ」

ぐふあ jhじゃ hhふ jh jふ jd jf hうえう——ふう、もちつけ、俺。

いやいや、おちつくんだ。あんな可愛い生物がいるハズがない…。(ちらっ)

「（涙目でこちらを見てきた）……………？（こてんっ）」

ブハアアッ！！！！

…………お前ら…さ、先に行ってくれ…………お、俺は…後から…追う…………
ゴフッ…（ばたり）

隊長 オオオオオオオオオオオオ……………！！！！！！。

とまあ少しハツチャけてみたが、なんか愛花が落ち込んでいた。

「どうしよう……………時間内に終わらないと、皆の足ひっぱる事になった
ちゃうよ。」

むくく、といってもアセると余計にカンじやいそーだし…」

そんな落ち込んでも…はあ、しゃあねえな…。

「愛花、大丈夫か？」

「や、やだ、慎吾くん見てたの？」

「まあな。集中できないんなら、もっと静かなところに行ったらどうだ？」

「だっ、大丈夫。少し動揺してただけだから……。私みんなと違って、

まだ上手い集中する型がなくって、入力の際はあせていつも時間くっちゃうのよね」

「うーん。落ち着いたら良いって事か…」

「あっほんと平気だから……1人で何とかするし」

「ばーか。なに言ってんだよ…（ぎゅっ）」

「あっ…」

俺は愛花の後ろに周ると、後ろから抱きついた。

「慎吾くん…／／／／」

———もみもみもみもみ——…

「む、胸を揉むのはどうかと思うよ／／／／あ…あん…やあん…」

「でも落ち着いたら？」

「ドキドキはするけどね…」

「まあ気にすんな。俺も見といてやるから、頑張ってみろ」

「…うん。頑張ってみる!!」

「――…29、30秒!」

「よし、合格。校舎戻っていいぞ」

「やった――」

「残りは6班だけか、どうなっている。3人はもう合格印、出てるんだな。水森はもういいとして」

「愛花がまだです」

「何をしてるんだ？授業時間が過ぎたら、不合格になるぞ」

「もう戻ってくると思うんですけど…」

そこでタイミングよく、愛花と俺はやってきた。

「スイマセーン、遅くなって」

「遅いよ」

「慎吾くんのおかげで、入力間に合ったみたい」

俺もここまで掛かるとは思わなかったがな…。

愛花はプレートを手につつと、魔法を発動した。

「じゃっ！…いきます！…！
『上昇磁流』！！」

「――15秒――…――20秒――…」

秒数が淡々と30秒へと迫っていく。

まあ大丈夫だろう。別に九澄みたいに、崖の上においてないしな。

「合格決まりだな」

じゃあ記念に久美でも襲うか。

「――…30秒!!合格だ!!クラスへと戻り、次の授業の準備で
もしておけ!!」

「「やった――!!!!」」

「ふう…合格できた」

俺は安心して愛花の頭を撫でながら言う。

「よくやったな、愛花…」

「うん!!慎吾くんのおかげだね!!」

「お前の実力だよ。とにかく戻ろうぜ」

課題を全員合格させた俺達は、クラスへと戻るため歩き出した。
ちなみにその日の夜、久美を家へと呼んだ俺は、次の朝までハッスルした。

続く

第7話 いやいや、野外らしいですよ。(後書き)

めっちゃ長くなった気がする。

なんかエロも多くなったと思うし…。

でも気にしない、それが作者クオリティー。

第8話 プレート強奪魔？知りません。（前書き）

お待たせしました。

少し短くなりましたが、更新です。

第8話 プレート強奪魔？知りません。

— — — — —
ide 慎吾 — — — — — S

「あ！来た来た、水森くん。オハヨ——！！」

学校に登校してきて、俺が靴を履き替えていると、何故か誰かに挨拶された。
声のする方を見ると、そこには3人ほどの女生徒が魔法書を持ち、立っていた。

「なに？」

「ちょっと教えてくれない？この秘呪文が解読できなくてー、魔法の入力ができないのよ」

そこで違う生徒が続く。

「水森くんなら読めるよねー。クラス違うけど教えてよ——」

「んー、まあいいけど…」

俺が女生徒に教えようとする——…

「はいはい。水森への頼み事は…まずは俺を通してからね!!」

伊勢が来て、勝手な事をいいながら、その女生徒の胸や尻を突いた。

「ギャーッ!! 伊勢よ!!!!」

「もーっ、なに触ってんのよ!!」

女生徒らはきゃーきゃー言いながら、走り去っていった。
というか何処まで嫌われているんだこいつは……。

「いーなー朝からモテモテで」

「伊勢……死ね……!!」

————バゴオンッ……!!

「ひでぶっ……!!」

まったく女生徒達との触れ合いを邪魔しやがって……ぺっ!!
すると俺に気付いたのか、周りに生徒たちが集まってきた。

「オ……水森だ」

「ホントだ」

その言葉を機に、そろそろと人が集まってくる。

「な——水森、困ってんだけど力になってくんね——?」

「今ちよつと2年と問題起きててさ――」

「水森くーん」

すると何故か倒れていたはずの伊勢が、何時の間にか近寄ってきて、なんか言い始めた。

「まてまて、まず俺を通してからだっての」

伊勢は右手の指を5本立て、左手の指を1本立てると言った。

「あー、水森が言うにゃ、頼み事は一人一回5千円だってよ。女子なら乳モミ10秒でもいいってよ」

バカだと思う。

「それ伊勢の願望だろー」

「水森、そんな事いわねー」

「そうよそうよー」

流石に伊勢もバレたようだ。これがイケメンとの格の違いだ！！
すると女生徒達がこっちにきた。はて？なんの用だろうか……。

「どうした？」

「……あ、あの…水森くんなら、べ、別に良いよ？」

先頭の子がそう言うと、後ろの女子も頷いた。

「え？胸のこと？」

「……………うん／＼／＼／」

……ふ、いいでしょう。それなら揉みます、いつまでも。
と言うのは冗談で、別にいいので断ることにした。

「ははは、別にいいよ。困ったことがあるんなら、手伝いくらいするよ」

「え？いいの？……（しゅん）」

いやいや、そんな落ち込んでも……。

「まあとにかく行くわ。じゃあな」

「うん。水森くん、またね」

俺はそう言っていると、伊勢の首を掴み、歩き出した。

「――人が沸いてくるのは、ムリねーって。お前は有名人だからよ」

「俺そんなに目立った事してねーけどな…」

「バツカ、この1・2年校舎でゴールドプレート持つ生徒は、お前だけなんだぞ？」

1・2年生どころか、3年生でもいるかは謎だけだな。

「ここじゃ今、2年差しにおいてお前が魔法の実力NO.1って事。ある意味、暫定ボスのポジションって感じ？」

「別に魔法力大きいからって、ボスって事はないだろ…」

「まあそれはわかんねーけど、お前がいるお陰で、

2年の1年イビリがかなり少なくなっているようだしな」

1年イビリとか…ダサ。そんな事して、何が楽しいんだか…。

「ま、例のプレート強奪魔は別にしてだけど」

プレート強奪魔？もうそんな時期か……どうしようかな。

「んなこと気にすんなよ。そうそう盗まれねーよ」

「そうだな。さすがにお前相手に、ケンカ売っちゃこないだろうーしな」

ホントなら来ますけどね。

そう思った矢先、後ろから俺たちを引き止める、女生徒の声が聞こえた。

「ねー君たち——！！」

声のする方へ、俺たちが後ろを振り向くと、そこには二人の女生徒がいた。

しかしこの二人には、俺の『女性発見センサー』に反応がない……：コイツ等か。

俺はとりあえず、このまま様子を見ることにした。

「君、水森君だよな。ゴールドプレート持ってるって1年生」

「そうですけど…」

「私達新聞部の2年なんだけど、向こうで話聞きたいんだ。
本校舎で魔法の実力NO.1の生徒。ついでに魔法も見たいんだ
けどな」

…もう面倒だし、教室いこ。

こいつ等は終父に任しとけばいいだろう。

多分あと数日もすれば、二人くらい在校生が減るだろうな。

「いえ、この後用事がありますので」

「いーじゃん!!ねー」

男子が、ねーとか言うな。

ん?あそこに見えるのは……………利用させてもらうか。

「あー!!百草紀先生、遅れてすいません!!」

「え、水森君?…あ、ああ!いいのよ、別に…」

俺がさり気なくアイコンタクトを送ると、それを察してくれたのか、理子は俺に合わせて同意してくれた。

「それじゃ俺は用事がありますので、失礼します」

「あ、ああ、うん。またねー」

俺は女生徒（仮）に声をかけると、理子の方へと向かった。

「つと伊勢は先行つといてくれ。少し用事があるから」

「ああ、早く来いよ」

「ああ」

俺は後に着いて来ていた伊勢と別れると、再度理子の元に向かった。

「よくやったぞ、理子」

「は、はい、ご主人様……／＼／＼／」

理子には、二人でいる時だけ呼び方を変えさせている。
良いじゃないか、主従プレイ……。

「あと俺といた女生徒二人組みを見張っといてくれ」

「新しく奴隷でも？」

「いや、あいつ等は多分魔法で姿を変えている。予想だが、プレイト強奪魔の犯人だろう」

というかそうなんだけど。流石に知ってたらおかしいだろうしな。

「流石です、ご主人様／＼／＼」

そんな熱い視線を送らなくても…。

「とりあえずそれは置いて、行こうか…」

「あっ…」

俺達はその後、人気のないところへ行くと、朝の運動を始めた。
その日は長く運動したので、結局二時間目の休み時間までしてしま
った。

「あ、ああん、ああ、うああ、やあん、い、イクーーーーーっ！
！！！！」

「まだまだあっ！！！！（ぎしぎしぎし……）」

そういえばあの二人組み、プレート強奪魔は、結局理子から柊父に
伝えられた事により、
監視をされているにも関わらず、その後も強奪していた所を捕まえ
られたらしい。

その日の次の日には、犯人2人は学校から消えていた。ざまあ W W W

「ラストお——っ！！！！」

「ああああああああんっ！！！！！！」

……ふう、スッキリした。

続く

第8話 プレート強奪魔？知りません。（後書き）

今回は短いです。

次回は多分ですが、生徒会が来ると思います。

お楽しみに。

第9話 生徒会魔法執行部

——ザッ、ザッ、ザッ

ここは1年教室前廊下。
そこに3人の2年生が歩いていた。

「アレが水森慎吾」

3人組が止まった場所は、1年C組前廊下。
教室にある扉の窓から主人公である水森慎吾の姿を捉えた。

「やって!!!!」

「オツケ——」

鳥肌がたち、脳内で危険信号を発しまくっている。

——上か!!!

俺は上からの突然の急襲に驚いたが、間一髪前に避け、UFOキヤッチャーの攻撃を避けることに成功した。

しかし、HFOはそのままこちらに来て俺の体をがっしり掴み、教室の扉の方へと移動していく。

「はーい水森くんだよね。私2年の宇和井 玲」

目の前には1人の女、その両隣には男子が2人いる。

「我々は生徒会魔法執行部。本日付であなたを我が執行部がもらいうける事になりました」

「は？」

何故だ……。別に学校長と繋がりはないはず。

それに俺を執行部に入れて、どうなる？ まあまだ学校長の仕業

かはわからんが……。

「生徒会魔法執行部!？」

「ウソ」

「なんでこんなところに!？」

クラスの生徒がいろいろ言っているがそんな事はどうでもいい。
というか罰則なしで校内で魔法使えるとしても、俺を捕まえるた
めに使うとかどんなだよ。

そこは普通に口で言えば良いだろ。つーか、さっさとは・な・せ
!!

「生徒会魔法執行部とやらが、俺になんの用だ?」

「言葉通り執行部の一員になってもらうって事よ。1年でありな
がらゴールドクラスの

実力者ってのは聞いてるし。資質は十分よ」

宇和井はニコニコしながら、耳元でささやく。

「先日のプレート強奪魔の一件もあなたなんだって？ 学校長も高く評価してるわよ。」

これほどの人材は今のうち傘下に入れとかないと損だもんね――

――」

宇和井は少し離れると、依然とにこっとしながら言った。

「という事でよろしくね」

――はい。慎吾くんプチッと来たぜ。

「学校長のやつめー！！ ぜってーぶつつぶすっ！！」

俺は力づくで、体を抑えるアームを開くと、廊下に転がり落ちる。

「なっ…うそ！？」

「捕獲よー！！ 相手はゴールドよ。魔法を使うスキを与えないで」

宇和井がそう言うときUFOの操縦者が俺を狙ってくる。
だがあらゆる武道に通じている俺に死角は無い！

「ふははははっ！！ 甘いわー！」

「は、はい！！」

俺は操縦者目掛けて、走り出す。
俺の目的を察したか、宇和井は髪につけているゴムを外すとプレートと一緒に投げてきた。

——『ブラックバンドウェーブ！！』

「そんなのに引っかかるか！！」

——『ビックシザース巨大鋏！！』

俺は鋏を巨大化させると、進路を遮るゴムを切り裂いていく。

「つく!! 切られたらどうしようもないわ。でも——…」

宇和井はニヤツとしながら言った。

「魔法、使ったわね？」

「な、まさか……」

宇和井はパンパンと手を叩くと、他の生徒会メンバーに声をかける。

「はい。部室にいくわよ。じゃあ水森くん着いてきてね」

「こ、この野郎……orz」

「早く行くわよー（ズルズル）」

[illegible]

ここは生徒会魔法執行部の部屋。
俺は校内で魔法を使ったペナルティーにより、この部屋に連行されてきた。

宇和井は俺の頭を両腕でがっしり抱え、胸に俺の顔を押し付ける。
ふむ。CかBだな。……え？ カップ数ですが、なにか？

「つーか、なんで入ることになってんだよ……」

「んもーそんな事言わずにー」

「いきなり言われて、入るほうがおかしいだろ。常識的に」

「いいじゃない。魔法執行部は魔法の実力の高い者しかはいれないのよ？」

「誰でも入れるワケじゃないんだから」

「宇和井は少し自慢げに親指で自分を指しながら言う。」

「そしてその中で私、宇和井はA校舎支部の副部長……つまり
NO. 2」

「部員の八条そうさ……」

「沼田ハルカよ」

「同じくさ……」

男の名前は基本聞かないし、覚えなない。

よし、沼田ハルカか。……いつか襲う！！ 可愛いし！！

え？ 宇和井？ ……うゝん。可愛いっちゃ、可愛いから襲う！！

「まあ俺は水森慎吾だ」

すると男子Aが話し掛けてきた。

「ここにはいないけど、あと2人部員と支部長がいるよ。総勢6名。もう人手不足だね」

伊勢兄と根暗支部長か……。そういえばもう少しで決闘的なのであるな。

でもアレは九澄だからあったわけで、こちらから関わらなければ特に関係ないか。

「現状じゃ僕らだけじゃ2年生の取締りで手いっぱいだね。最近増えてきた1年の問題にまで目が届かなくなってるさ。それで校長と柊先生の推薦もあって君を加入させて、1年の監視をまかせられたらなって考えているんだ」

柊父まで関わっていやがったか……。ブツコロ。

「まってよ、ダメよ!! このコは私の部下にするって言ってるでしょ？」

「だー! えーい! 離さんかい!」

なぜ宇和井は何かあるごとに抱きついて来るんだ。

俺がイケメンでカッコイイのはわかるが、何も抱きつかんでも…。

「ねー水森くん。私、君みたいな元気のいいコといっしょに仕事したいわ」

「襲うぞ」

「べ、別に期待してるんじゃないんだからね!」

「嘘、言ってるじゃねーよ……」

「あつ、バレた? てへっ♪」

てへっじゃねーよ。やんちゃかお前。

「それで結局入るの？ 執行部」

「別にどっちでも良いな」

「よーし！！ じゃあ水森くん入部決定くー！！」

宇和井がまた頬にキスをしようと突っ込んできた。
正直面倒なのでそのままにしている。
その時悪魔的な声が聞こえてきた。

『まてやー！！ 俺いねー時に決定っつー言葉使うんじゃねー』

「どあー！！」

叫び声とともに、2人の男子生徒が輪っかに繋がれて飛び込んできた。

その後、変な帽子を被った男子生徒も入ってきた。

「はい、2人とも反省文書いてって。もう授業始まるから…その、手早くね……」

「支部長……!!」

どうやらあれが支部長らしい。

原作どおり気が弱そうな男子である。喋り方からして、あまり気迫は無い。

「ハハ…魔法バトルやってたもんで、捕まえてきました。今、反省文書かせて……帰しますから」

「オ、オハヨ——」

ホントに気弱だな。なんでこれで支部長なんだろう。まあ実力があるんだろうな。

「えと…その人が水森くん？」

こちらに気づいたらしい。

「ウワサは重々…でも…その、入部の件は…その、簡単に決められちゃ…」

やべえ、殴りてえ。

「えーと、決定権は……私に……あつてですね」

そこでまたあの声が聞こえる。

『つまり俺抜きで勝手に決めんなっつてんだボケ共が』

コイツはコイツでウザイな。

『決定は支部長の俺がする。役立たずは共は黙ってろっての』

「いえいえ、そこまで思っちゃいない……ようなきが、ハハ」

宇和井が近くによってきて、話しかけてくる。

「あれ魔法なのよ。支部長って元々、人前で本音を話すの苦手な人でね。」

あーやってあいつに本音を喋らしてるのよ」

『るっせーブス!! 黙っとけ』

「やだなー。本音っていうか、誇張した自我ですよ。誇張した」

ホントに変な奴らばっかしだな、ここ。

『とにかくそいつの入部は、すぐ認めるワケにはいかねーな。ど
ーにも気にいらねえ…』

「じゃあどうするっつーんだ」

『校長の薦めでも、使えるか使えねーかは、テストしてみねーと
わかんねーって』

「テスト？」

『1年ながらゴールドプレート持つてるやつとは聞いてるし、ま
ー魔法は問題ねんだろう。』

ただ執行部の仕事は度胸と行動力が必要だからな』

「どの程度の人材か、ぜひ確認したいなーと」

『イタズラでも、このくれーの事できねーチキンはこっちじゃ願
い下げなんだよ。』

どーすんだ、逃げんのか？』

くそ。この帽子破ってやろうか……。

「……行ってくる」

……

……

……

……

「で、どうすつかねー」

柊父だから適当でいいか。

——ガチャ

来やがった。よし！ やったろかー！

「天誅——っ！！」

——ガシッ！！！！

「水森！？ こんな所で何の用だ？」

ふっ、まだまだだな。

「あー！！ 愛花がナンパされてる！！」

「なに？」

「こーなりや、俺は締め技」

——きゅっ、グリッ!!

「ぐっ!! (がくっ)」

「これで354戦16勝15敗323引き分け」

これで俺の勝ち越しだ。

——キユ、キユ、キユー、キユキユ

「よし。これでいいだろう」

俺は柊父の額、というか顔全体を芸術にすると適当に端っこに置

いて、支部長の元へと戻った。

「こんなもんでいいだろ？」

『まあな。流石に締め技はどうかと思ったが、顔の芸術は良かった』

ふっ。俺の芸術魂をなめるなよ。

正直俺も締め技は不味かったなーと思ったけど。

そういえば柊父はその後、他の先生に見つかったらしい。

俺はその日から、魔法執行部に入ることになった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3946r/>

えっ?転生?しますけど,なにか?

2011年4月2日15時16分発行